

「2016年度 香港中文大学サマースクール(中国語コース) 参加報告書」

京都大学法学部4回生 難波 尚史

私はこのプログラムを終えて、得られたものは何だったのか未だに掴みあぐねている。それだけ香港中文大学の留学は私にとって価値観を壊し、視野を拓げ、想像を超えるものだったことはぼんやりと感じている。そもそも香港中文大学に留学を決めた理由は、大学からの提供プログラムであること、中国語を学び、また実践的に使える場が欲しかったことなどだが、最も大きな理由は香港という地が小説『深夜特急』で魅惑溢れる都市として書かれていたからである。実際、香港は高層ビルが立ち並ぶ近代的な街並みと、一転して路地には溢れる路上市場と人々の喧騒が混在する街だった。以下、①授業、②生活、③課外活動の観点から実生活に即して述べたいと思う。

①授業について

レベル別に英語または中国語で行う。基本的な流れは2日で1課、単語や文法学習を主に行う日と聞く・話すを主に行う日を交互にこなした。私はレベル2で、先生の言うことは最初から8割程度聞き取れるくらいだった。最初の数日はお試し受講が出来たので自分にあったレベルが選択できる。進め方は主に講義形式だった。最終日にはまとめテストや、また毎日の単語テストなどもあるが授業に出席して、しっかり聞いていれば簡単に復習するくらいで足りるように感じた。

②生活について

普段の食事は昼・夜に食堂が利用でき、宿舎の地下や講義室周辺にある。朝は各自パンなど食べている人が多かったように思う。大学の食堂は1食約300円で、香港の街中で食べるよりも半額ほどで利用可能である。部屋の設備は机・イス・冷蔵庫・クローゼットなどで2人1部屋の共同生活を送る。シャワーや洗面台は共同使用する。生活品の購入は大学内にスーパーがあるが、如何せん宿舎などから遠く、工事中だったからか規模もさほど大きくない。また、宿舎から講義室はかけ離れており、主にバスでの移動となる。大体時刻表通りだが、満員で乗れないこともある。

クラスの友達との交流は基本的に英語で行われる。私の場合、聞き取りは出来ても流暢に話せなかったのととても悔しい思いをした。

③課外活動について

授業がない日は、フィールドトリップが行われる。基本的に同じクラスの人4~5人と現地学生1人がグループとなって行動する。手配や計画等は現地学生が行ってくれるので、特に注意すべきことは盗難くらいだった。大学プログラムの一環で行われる現地学生との交流会では、香港の学生のプレゼンの質が高く、とても興味深いものばかりであった。私としては、空き時間に香港の街を歩いてみたことが新鮮な発見や気付きにつながった。日本では味わえない、ナマの香港を自分の目や身体に刻みこめたように感じる。

④総括

海外の学生は英語を話せることは当たり前で、また将来の仕事についても自分の専攻と関連付けて、明確な未来像を持っている人が多かった。自分を省みると忸怩たる思いを感じたが、日本について学ぶ香港の学生からすれば「日本はしっかり伝統や文化を守る国だ。香港はそうではない」という意見を聞き、深く考えるきっかけになった。「この留学で中国語を就職に生かせれば」という軽い気持ちで来たものの、振り返ってみれば得た経験を咀嚼するのにまだまだ時間は必要だが、確実に人生の糧にはなりえるだろうという妙な確信だけが残った。